

# *erudio* 13

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター通信 2010.11

Iwate University : University Education Center

## Contents

ごあいさつ	2
部門長より	3
運営委員会	4
入試部門	5
全学共通教育部門	6
教育改善部門	8
専門教育等連携部門	10
学生支援部門	11
キャリア支援部門	12
全学共通教育授業紹介	13
環境人材育成プログラム	14
いわて高等教育コンソーシアム&いわて未来づくり機構	15
アイアシスタント&匠の技	16
全学共通教育の理念と教育目標	17
委員会及部門会議名簿	18

## ごあいさつ



### センター長より

たま しんの すけ  
玉 真之介

大学教育総合センター センター長  
(理事(総務・教育・学生担当)・副学長)

#### ■「学士力」は大学を映す鏡

岩手大学の学士課程教育の学習成果を示すために、理事室で「学士力」のたたき台案を作成しました。「学士力」とは、現在、岩手大学が授与している「学士」という学位の自身を、得られる知識・能力として明文化するものです。言い換えると、これまで教育目標や人材養成目的として示していたものを、学ぶ側に立って学生が身につける知識及び能力として表現するものです。

それにより、受験生や在学生、そして企業等は、教育課程をいっそう具体的に理解することができ、また、「本当に力はあるのか」という視点から見ようになります。

たたき台案作成のために、理事室会議を4月から7月まで7回開催しました。いつも議論となったのは、「学士力」のわかりにくさ、分野別質保証やディプロマポリシー、学習成果との関係などです。その理解を促すため、A4で1枚程度のディスカッション・ペーパーで、ポイントを伝えることにしました。

現在の教育目標を基礎に、学生が身につける力として検討し直し、簡潔な「力」として表現しました。その際に、「知識・理解」「汎用的スキル」「態度・志向性」の3つに分け、そのバランスにも配慮しました。

中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」が示した「学士力」の参考指針と比べもらえれば、かなり違うことがわかります。ひな形の丸写しではなく、岩手大学で進めてきた教育を議論した上で、1つ1つの項目を精査していきました。

おそらく、来年には多くの大学が「学士力」を公表します。中には、中教審の参考指針をそのまま掲げる大学も出てくるかもしれません。それでは、大学の見識が問われます。なぜなら、「学士力」は大学を映す鏡だからです。大学は、教育に携わるすべてのものが「学士力」を1つの鏡として、社会に対してその身だしなみを整えていかねばなりません。

そのためにも、「学士力」の策定に向け、活発な議論をお願いします。そのためのホームページ(学内限定)を作りましたので、活用下さい。

<http://uec.iwate-u.ac.jp/limit/gaku/index.shtml>



### 副センター長より

かわ た ひろ き  
河田 裕樹

大学教育総合センター 副センター長  
(全学共通教育部門長)  
(教授 人文社会科学部専任担当)

今年度から大学教育総合センターの仕事に従事することになりました。大学教育改革に直接携わったことのなかった一教員としての大学教育は、自分の担当する範囲での教育論でしたが、今後は全学的な視野から教育を考えるということに責任の重さを感じております。

センター兼任になって早くも半年過ぎましたが、この間に大学教育センター会議、シンポジウム等で他大学の先生方の講演、お話を聞く機会がありました。他大学の教育改革、授業改善例の報告では、もちろん参考になる場合も多々ありましたが、ほとんどは岩手大学がすでに実践していることで、本大学の改革、改善も随分と進んでいるという実感でした。教育改革、授業改善は、ともすれば一方的な教員への負担増と受け取られかねない事案ですが、全学での十分な議論、合意なくしては実践できません。今までセンター運営に携わってこられた教職員の方々の、教育改革に対する真摯な取り組みあつてのことだと思えます。さらなる展開できるよう努力を尽くして参ります。

大学教育総合センターの教育改革、改善案の主語は、「学生」です。中教審答申(2008年)では「学生の学習成果を明確にすること」、すなわち「何を教えるか」より、学生は「何を知り、何が理解でき、また何ができるようになるのか」などアウトカムズに力点が置かれています。8月のいわて高等教育コンソーシアムFD合宿で、立命館大学の木野茂先生は課題探求や問題解決能力を中核とする学士力の達成には双方向型の授業(学生の主体的な参画)が不可欠、というお話をなさいました。様々な形態で学生が授業に参加している(自分で考える、授業が楽しい)という実感を持つことで、教員も活性化される、結果として学習成果が明確になるということでした。

高等教育がマスからユニバーサル化へ進行していく中で、学生の多様化、学力の多様化も顕著化し、その質的維持が課題となっています。いま全学で議論されている「学士力」の策定と相まって岩手大学の学士課程教育の充実は、教職員の方々のセンターへのご理解、ご協力があつて初めて可能となります。よろしくお願い致します。



にし たに やす あき  
西谷 泰昭

専門教育等連携部門長  
(教授 工学部専任担当)

4月から専門教育等連携部門長になりました西谷です。これまで、大学教育総合センターの業務には、教育評価・改善部門(現教育改善部門)、就職支援部門(現キャリア支援部門)の兼務教員として携わってきましたが、2年ほどのブランクの後、本部門を担当することになりました。

さて、本部門の任務は「専門教育の全学的な連携」に関することとなり、具体的には、「基礎ゼミナール」に代表される初年次の転換教育と「専門基礎科目」に関する学部間の連絡・調整が主な任務です。

転換教育は、「高校生を大学生へ移行させる」ための教育と言われており、その内容は、大学での学習スキルにとどまらず、大学生活への適応、キャリアプラン、学習目標・動機付け、専門領域への導入など多岐にわたります。

岩手大学の基礎ゼミナールも、立ち上げから数年となり各学部での実施も落ち着いてきたところだと思いますが、基礎ゼミナールだけで転換教育が完結するわけもなく、「高校生を大学生に移行させる」ための支援を、基礎ゼミナールの内容を含めて他の科目との関連、位置づけ、担当者などを総合的な視点で検討する時期のように感じています。

専門基礎科目については、農学部・工学部の学生に対して年間約70コマが開講されています。担当体制(いわゆる12名体制)は、人文社会科学部の12名の教員(数学担当教員4名、物理学担当教員3名、化学担当教員3名、生物学担当教員2名)と農学部、工学部の教員からなります。この体制は、法人化以降の改組・定員削減など大学運営の方針を考慮しつつ、各学部の教務委員会、授業担当教員の間で調整をした最低限の体制ですが、人文社会科学部の担当教員の欠員が増え、その維持が難しくなっているのが現状です。

上記の課題だけでなく、専門基礎科目には、その位置づけ、教育理念、実施責任組織の曖昧さなど検討すべき課題も多くあります。その改革案については組織検討委員会／教育プログラム検討WGに期待し、まずは、現在の専門基礎科目を維持し、充実することを喫緊の課題として取り組みたいと考えています。



やす だ じゅん  
安田 準

キャリア支援部門長  
(教授 農学部専任担当)

今年からキャリア支援部門長を仰せつかっています。専門は農学部獣医学課程の小動物内科学です。獣医学教育は獣医師という職業に必要な知識・能力を教育することが求められており、卒業時には国家試験で全国一律のレベルで教育結果を評価されます。したがって岩手大学の中では数少ない具体的な職業を念頭に置いたカリキュラムを作成しています。さらに獣医学課程の中でも臨床関係の教員は現役の学生の教育だけでなく、獣医師の卒後教育にもかかわっているので、獣医師のキャリア支援に限って言えば「プロ」ということになります。玉大学教育総合センター長から、本学全体のキャリア支援をこれまでかかわって来た獣医学分野のキャリア支援の目から見てもやれることがあるだろうと説得され、お引受けした次第です。

大学入学時に将来の具体的な職業を考えている人はごく少数だと思います。日々の講義を受けるだけでは学問的興味は芽生えても、仕事に結びつけることは難しいでしょう。大学の授業科目が専門学校と大きく違うのは職業と一対一で直結しておらず、多様な講義のカリキュラムをこなして行くことで、社会に対する価値観の客観性が身に付くと考えられているからです。大学時代は講義を受けるだけでなく、アルバイトやボランティアなどを通じて社会経験を積み、将来の職業を意識することも大切です。そうは言っても具体的な職業選択の手順を早い時期から知っておくことは重要なことです。キャリア支援部門では年間を通して色々な企画を準備しています。講義と違って受身では何も得られません。積極的にキャリア支援室に出向き、情報を得ることから職業選択の第一歩が始まります。自分の人生にかかわることですから、自分で道を切り開くことは当然です。キャリア支援部門はそのお手伝いをしますが、活用するかしないかも自分で決めることです。学生諸君が笑顔で卒業を迎えることをキャリア支援部門一同希望しています。

## 運営委員会

大学教育総合センター長 玉 真之介

### ■年度計画

今年度、運営委員会が実施担当となった年度計画は2つでした。1つは、「本学の人材養成目的に相応しい『学士力』の第1次案を取りまとめる。」。もう一つは、「『学びのマネジメント』に関する他大学の調査研究を行うとともに、本学の取組を検討する。」です。

前者については、議論のための「たたき台案」をまず総務・教育・学生担当理事室で取りまとめることとして、その「たたき台案」が8月5日開催の第4回運営委員会にようやく出てきました。この案について、各学部や全学共通教育分科会で10月末までに検討してもらい、意見を寄せてもらうこととしました。教員にとっては、大学全体にかかる内容であるため少し縁遠い感じがするかもしれませんが、受験生や在学生、社会に対して大学が示す「学位」の中身ですから、ぜひ機会ある毎に話題にして、意見を出してほしいと考えています。

また、後者については、6月3日開催の第2回運営委員会で、各学部に対して、他大学への調査の希望を募りましたが、結果的に調査の希望はありませんでした。今後、年度末に向けて、新入生に「学びのマネジメント」意識を持たせるための方策を検討していかねばなりません。9月30日開催の教育改善部門のセミナーで、東北大学工学部の学習ポートフォリオについて話題提供がなされます。こうした先進的な大学から学んで、遅れないようにしていく必要があります。

### ■教育情報の公表

昨年から今年にかけて大学教育の焦点となってきたのは、質保証というテーマです。特に、中央教育審議会大学分科会の質保証システム部会が頻繁に会議を開き、大学教育の質保証に関する議論を急ピッチで進めてきました。その一部として、5月に「教育情報の公表の促進」が具体的な方策として示されました。すなわち、学校教育法施行規則の改正が決まり、9項目の教育情報を公表することが来年度から義務づけられました。

さらに、「大学が、教育上の目的に応じて学生が修得すべき知識及び能力に関する情報を積極的に公表するよう努めること。」という規定も加わり、「学士力」を初めとして学部、学科、課程についても、教育課程の「学生が修得すべき

知識及び能力」(=学習成果)を公表していく求められることになりました。

これに対しては、6月3日の第2回、7月1日の第3回運営委員会で議題として取り上げ、現状の確認と今後の課題を確認しました。10月以降、「学士力」の検討を追いかける形で、各学部、学科、課程についても学習成果を検討し、公表していく必要があります。

これらは、現在の教育課程によって期待される学習成果であることが重要です。ですから、決して難しい課題ではありません。公表のタイムリミットは、平成25年に受ける次の認証評価です。

### ■新たな取組

5月12日の第1回運営委員会では、これまで学則にしか規定のなかった再入学について、取扱を定めた再入学取扱規則を審議了承しました。また、専門教育等連携部門で実施を決めた「特別な支援を要する学生に関するアンケート」の実施方法について、「基礎ゼミナール」で実施することを決めました。

また、学生支援部門から議題としてあげられた授業料免除規則の改正を審議了承しました。この改正では、①大学院博士課程の学生への授業料の半額免除、②内定取消など特別な事情の授業料免除、③全額、半額に4分の1免除等を追加しました。

6月3日の第2回運営委員会では、「FDプラン」の見直しを行うことを確認するとともに、キャリア支援部門でまとめられた「大学生の就業力育成支援事業」への申請書について審議了承しました。

7月1日の第3回運営委員会では、今年度のFD合宿について審議しました。今年のFD合宿は、2つの点で新しい挑戦が含まれていました。1つは、いわて高等教育コンソーシアムによる5大学共同のFD合宿であること、もう1つは、学生が参加するFDであるということです。8月26日、27日に、多くの成果を得て無事終了しました。

8月5日の第4回運営委員会では、第1回全学共通教育シンポジウムの開催について審議しました。11月4日に、本学はじめてのシンポジウムが開催されます。

専任教員 永野 拓矢

## ■はじめに

大学教育総合センター内に入試部門が設置され5年目を迎えました。部門業務のひとつである「高校訪問の重要性」の認識が学内に浸透し、入試部門の専任教員や入試課事務スタッフほか学部教員が地元岩手県や東北地方はもとより、遠くは北海道や関東以西にも積極的な高校訪問を展開しています。今春入試ではセンター試験難化による受験生の手堅い出願と高止まりとなった本学各学部の入試難易度(受験産業による)、さらに昨年志願増の反動を強く受けて一般入試の志願者は減少しました。しかし志願前の調査(センターリサーチ)では対前年並みの志望数があり、本学に対する評価や教職員が一同となった広報戦略は効果が感じられます。今後も積極的な広報継続したいと考えています。

## ■定着した岩手大学「主催」説明会



本学入学者の出身地別割合(09年)は地元岩手から約46%、東北全体では約88%と地域密着型として認知されています。

それ故従来から高校生対象の業者主催の大学説明会・相談会では会場によって相談者が本学ブースに集中することで教員個々の対応が困難になり、満足度の低下が懸念されていました。

「もっと満足度の高い説明会を」の要望に応えるべく発足したのが本学主催の大学説明会です。「(業者に頼らず)“岩手大学の全て”を自らが伝える」ことを第一義として、4年目の開催となった今年も県内および県外近郊拠点都市(青森、八戸、仙台)に5~7月の土日に集中的に開催し、7会場で約480名の来場がありました。

当説明会は「前半パート(パワーポイント使用の概要説明:40分)」と「後半パート(教職員による個別対応:終了まで)」に分割して行うことが大きな特長です。「岩手大学には関心あるけど何を聞いたら分からなかったので前

半部の全体説明は大変役に立った」等、保護者や低学年の参加者にも「前半パート」は毎年評価を受けています(参加者アンケートより)。

実施初年度の賑わいと比較すれば近年は落ち着きが見られますが、「後半パート」の学部ブースへの質問など、より本学を真剣に考えている受験生にとって当大学説明会は欠かせない企画に認知された観があります。

また、昨年より始まった「(直接)高校での岩大説明会」は今回も八戸北高校(青森県)と大曲高校(秋田県)にて8月上旬に実施しました。過密化する学校行事等のバッティングや過剰傾向にある業者主催大学説明会への食傷感から参加を控える高校も増加しています。こうした高校の事情に鑑み、本学への進学数が多い高校に学部教員とともに出前講義をプラスした新しいタイプの大学説明会・相談会を出向いて実施しました。東北地方の進学学校では夏休みが短い上に連日の夏期補習などでオープンキャンパスも参加困難な場合が多々あります。こうした需要に応えるために本学への関心を維持、あるいは高めていただくことを狙いとして実施しています。

## ■『がんちゃん母校に還る』企画の実施

毎年数名、あるいは数年ぶりに岩大入学したなど大学進学の実績が少ない地元の小規模高校に注目し、その出身である本学在学生在が母校に戻り、後輩に大学進学の魅力や、岩手大学のPRを大いに語ってもらう企画を今年から始めました。

第1回目は岩手県最南端に位置する各学年2クラスの花泉高校です。当校卒の学生(人文社会科学部3年、写真中央の学生です)が出向き、約80名の後輩、および当校先生方の前で報告を行いました。当日は大変な盛り上がりで、ちょっとした凱旋となりました。このような機会を通じて小規模校からの本学入学者増を期待しています。



# 全学共通教育部門

## ■新分科会代表から一言



### 「外国語」分科会代表

さいとう ひろつく  
齋藤 博次  
(教授 人文社会科学部専任担当)

全学共通教育の外国語分科会の代表になった齋藤博次です。やるべきことがたくさんあり、「さて困ったぞ」というのが本音です。思いつくままに列挙してみても、(1)外国語改革の検証、(2)成績評価の公平性と客観性の確保、(3)全学体制の実質化、(4)入学前教育への対応など、やるべきことが山積しています。また、将来的に全学共通教育の外国語教育を維持していくことが困難になることも予想され、それへの対策を講じることも急務です。分科会の構成員の方々のご協力を切に願います。



### 「公共社会」分科会代表

たか はし こういち  
高橋 宏一  
(教授 人文社会科学部専任担当)

「公共社会」は、人間と社会の関係を主題とする教養科目です。しかしながら、最近の若者は社会性に欠け、視野が狭いとよく批判されます。自分の家族や友達などの狭い枠の中に閉じこもり、その外側の世界を排除しているようにも見えます。そのような状況の中で、我々の授業が、社会とそこでの営みが人間にとってどのような意味や機能を持っているのかを、学生一人一人に考えてもらおうきっかけになってもらえたら幸いだと思います。



### 「心と表象」分科会代表

おだ のぶお  
織田 信男  
(准教授 人文社会科学部専任担当)

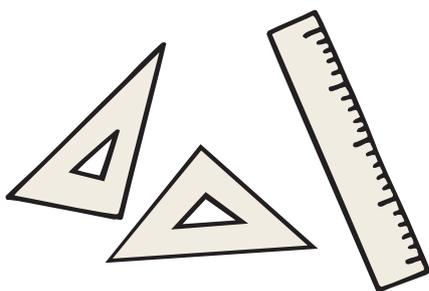
「心と表象」の分科会は、心理、言葉、文学、芸術関係の科目群から構成されています。いわば、言葉をはじめとしたさまざまな媒体を用いて表現された人間の心理や自然などの対象を幅広く学ぶことができるように構成されていると言えるかもしれません。学生の皆さんには、これらの授業を受講することにより、時代の最先端の知識だけでなく、時代が変わっても変わらない考え方や感性などをじっくりと身に付けていただきたいと思います。



### 「現代の諸問題」分科会代表

みつ い たかひろ  
三井 隆弘  
(准教授 教育学部専任担当)

社会が高度化複雑化するにつれ、われわれが直面する諸問題の原因も複雑多岐にわたっています。加えて、それぞれの立場によって利害関係が異なるため、解決法もなかなか見つからないのが、現状なのだと思います。しかしながら、それらの問題に無知や無関心でいることは、社会全体としても個人にとってもますます事態を悪化させることになるでしょう。本人の意思にかかわらず、社会の情勢によって、個人の運命が決まってしまうことはめずらしくありません。現在進行形の事件や出来事を冷静に判断できるようお役にたてることを願っています。



専任教員 山崎 憲治

## ■第1回全学共通教育シンポジウム開催に向けて

岩手大学の全学共通教育を巡って、11月4日(木)午後3時から5時半、シンポジウムが開かれます。

ここでは議論の焦点に次の3つの課題をあげています。

- 1) 岩手大学は、平成19年度からESDや基礎ゼミナールの導入等を内容とする改革案を実施してきました。いらい3年が経過した今、改めて全学共通教育改革の経過をふりかえり、到達点の確認と残された課題を考える必要があります。
- 2) 教育の質保証の観点から、人材育成目的に応じて学生が習得すべき知識・能力を明示することが課題になっています。「学士力」は学部を越えた全学共通の学習成果を内容とすることから、全学共通教育の教育内容に見合ったものであるかどうかについて議論する必要があります。
- 3) 岩手大学の全学共通教育は、全教員がいずれかに所属する分科会によって実施されています。全学共通教育の充実のためには、各分科会の活性化はもちろんですが、分科会同士が共通教育の充実に向けて論議する場が必要です。

このシンポジウムは学外から識者を求めて実施するものではありません。岩手大学内発のシンポジウムです。また、本年を初回として毎年開催を目指します。課題報告をうけ、これに沿って各分科会からのコメント・論議を展開する予定です。具体的には次に挙げる事項に関して報告・コメントを受け展開を企画しています。

### ①「岩手大学の全学共通教育改革とその到達点」

報告者：岩手大学教育総合センター長

コメンテーター：「健康・スポーツ」、「思想と文化」、「公共社会」分科会代表

ディスカッサント：「生物の世界」、「自然と数理の世界」、「環境」分科会代表

### ②「岩手大学が学生に修得させることをめざす『学士力』」

報告者：教育・学生担当理事室会議

コメンテーター：「外国語」、「情報基礎」、「心と表象」分科会代表

ディスカッサント：「現代の諸問題」、「科学技術」分科会代表

学生が大学に入学して初めて学ぶ共通教育を活性化しない限り、学生にとって豊かな学生生活は創れません。単位の取得に止まらない、広い視座と学習の可能性を実感できる共通教育へ、岩手大学独自の改革を進めていく一里塚としてこのシンポジウムを位置づけたいと思います。

## ■総合科目の充実に向けて

岩手大学の共通科目を特色付ける大きな要素として総合科目の存在をあげることが出来ます。現在13の科目が学生に提供されようとしています。総合科目は、各分科会が開講する教養科目とは異なり、文理融合の課題追求が可能になったり、複数の教員が担当することで生まれる複眼的視点や多様性が尊重されるという特色を持っています。そのため、特定の分科会に属することなく、分科会を横断的に組織して実施する科目になっています。この特色を維持発展するにはそれぞれの科目のコーディネイト役に相当の負担がかかることとなります。科目を担っている教員の異動もあります、学生の学びのニーズも変化します。新しい視点・方法を加味する必要も生まれます。ますますコーディネイト役は苦しい思いをすることになります。

総合科目の大半が多くを受講生を抱えています。科目の維持発展には特別な支援が必要だと思われます。新任教員のリクルートは新規開設科目の開拓につながります。何よりも、新しい総合科目を創ってみようという教員の意欲をバックアップする体制が不可欠です。



# 教育改善部門

専任教員 江本 理恵

## ■全学共通教育授業公開

平成22年6月7日～6月11日の間、全学共通教育のすべての授業を公開する「授業公開」を行いました。

期間中、授業モニターにご登録いただいた保護者の方々を含め15名ほどの市民の方々にご来校いただき、「大学の授業を参観するのは初めての事で良く分からないのですが、授業がだらだら進むように感じたのと、学生の反応がない事に少々驚きました。」など、大学の授業に対する率直なご意見をお伺いすることができました。同時に、「身近な問題から深刻な社会問題にアプローチしていることがとても興味深かったです。結論には至りませんでした。議論の進め方に工夫している様子を感じました。また、皆さんが積極的に意見を発表していて、講義とはまた違う雰囲気でも楽しかったです。」など、大学ならではの授業を評価いただく意見も多くいただきました。

## ■FD合宿研修会

平成21年8月26日、27日の1泊2日で、恒例のFD合宿研修会を行いました。今年度は、いわて高等教育コンソーシアムの取り組みの一環としてFDプロジェクト委員会との共催で、「学生とともに考える『大学教育』」というテーマを掲げ、5大学から40名の教員、8名の職員、そして4大学から9名の学生さんが参加しての研修会となりました。

基調講演では、立命館大学の木野先生をお招きして「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」というタイトルでお話をいただきました。木野先生は、学生の「学び」に着目したパラダイム変換を実現するための「双方向型授業」に長く取り組んでこられました。講演では、木野先生が今までに行ってきた様々な実践についてご紹介がありました。木野先生は、授業は教員、学生の双方によって作られるもの、という考えから、いわゆるFD活動に学生を巻き込む「学生FD」の試みに取り組んでおり、その活動のご紹介もいただきました。

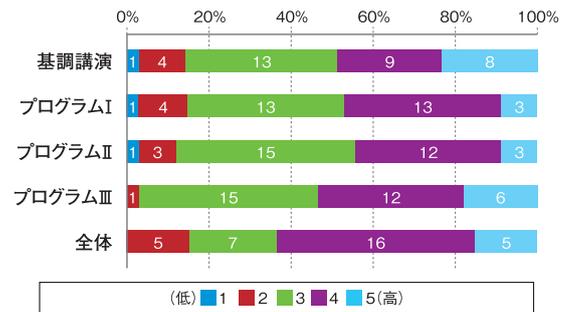
ワークショップでは、学生とともに大学での「授業」を考えるためのプログラムI、II、そして、いわて高等教育コンソーシアムの取り組みの一環として、「地域リーダー育成プログラム」の科目を考えるプログラムIIIが行われました。

5大学の教員の参加&学生の参加という2つの新しいことに取り組んだ今年のFD合宿研修会ですが、学生の参加で雰囲気も和やかに、多様な専門の教員が集うことで充実した研修会になったのではないかと考えております。来年度以降も、このような研修会を企画・実施したいと考えておりますので、みなさまのご参加をお待ちしております。

### アンケート集計結果(一部抜粋)

Q. 今回の研修会の各プログラムについて、5段階で評価してください。

- 基調講演 ▶ 学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD
- プログラムI ▶ 学生・教員の双方にとって『良い授業』とは?
- プログラムII ▶ 学生提案による共通教育(教養教育)科目を考える
- プログラムIII ▶ いわて高等教育コンソーシアム「地域リーダー育成プログラム」の中に組み入れる授業科目を考える



## ■学生による授業アンケート

教育改善部門では、前後期に開講されるすべての全学共通教育科目を対象として、学生による「授業アンケート」を実施しています。授業アンケートの結果は、個々の授業担当教員に返却する他、部門会議で策定した基準にしたがって「全学共通教育優秀授業科目」を選出しています。

平成21年度後期の優秀授業科目は以下の通りです。

7月21日に、菅原副学長をお迎えしての全学共通教育優秀授業科目の表彰授与と優秀授業科目担当教員と理事、副学長との懇談会を行いました。

平成22年度より、アンケート実施回数が減りますので（基本的に2年に1回）、少しは教員・学生の負担が減るかと思えます。

### 平成21年度後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目 一覧

#### ■人間と文化

0010	心の理解	山口 浩
0002	倫理学の世界	小林 睦
0016	芸術の世界	煤 孫 康 二
0009	心の理解	佐藤 正 恵

#### ■人間と社会

0048	多文化コミュニケーションB	松岡 洋 子
0038	社会的人間論	塚本 善 弘

#### ■人間と自然

0058	生命のしくみ	牧 陽之助
------	--------	-------

#### ■総合科目

該当なし

#### ■環境教育科目

0074	生活と環境	菅原 悦 子
0078	水と環境	河合 成 直

#### ■外国語km奥(英語)

0310	英語コミュニケーションI(中級)	Blair Benjamin Reed
0311	英語コミュニケーションI(中級)	Gavin Young
0312	英語コミュニケーションI(初級)	Hareyama James Franciscus
0327	英語コミュニケーションII(中級)	Blair Benjamin Reed
0304	英語総合I(初級)	Gavin Young
0319	英語総合II(中級)	伊 東 栄志郎
0377	英語コミュニケーションII(初級)	Hareyama James Franciscus
0342	英語コミュニケーションI(上級)	Blair Benjamin Reed
0308	英語総合II(初級)	三 浦 勲 夫
0328	英語コミュニケーションII(中級)	Gavin Young
0330	英語コミュニケーションII(初級)	Hareyama James Franciscus
0369	英語コミュニケーションII(上級)	Blair Benjamin Reed
0325	英語コミュニケーションII(上級)	Bern Mulvey
0367	英語コミュニケーションII(上級)	Townsend Simon Douglas Cater
0368	英語コミュニケーションII(上級)	Gavin Young

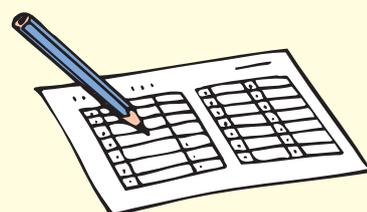
#### ■外国語科目(英語以外)

0476	上級日本語E	松岡 洋 子
0422	中級ドイツ語	大 友 展 也
0468	初級韓国語(発展)	齊 藤 春 佳
0472	中級韓国語	崔 在 繕
0425	初級フランス語(入門)	加 藤 隆

0473	中級韓国語	姜 奉 植
0446	中級フランス語	中 里 まき子
0445	中級フランス語	グラ アレクサンドル

#### ■健康・スポーツ科目

01060	テニス	鎌 田 安 久
01014	バドミントン	若 林 美 帆
01023	バレーボール	若 林 美 帆
01011	体力トレーニング	澤 村 省 逸
01035	バドミントン	若 林 美 帆
01034	バレーボール	阿 部 令 奈
01052	バドミントン	阿 部 匡 利
01015	バスケットボール	阿 部 匡 利
01032	体力トレーニング	佐々木 優 次



## ■ 専門教育等連携部門

専任教員 山崎 憲治

### ■ 基礎ゼミの前進にむけて

大学がユニバーサル化する中で、多くの課題が浮かび上がってきました。低学力への対処、学習環境への不適応への対応、自立した学生への期待、これらを大学内部からの問いとするなら、外部からは「学力保証」を見える形で求める動きも顕著に見られます。これらの課題に深くかかわるものが、初年次教育です。どのような初年次教育プログラムを用意し、実践しているかを、大学評価の指標にする動きも見られ（日経、2010年2月15日「教育」）、初年次教育はそれぞれの大学の教育を特色付けるものになりつつあります。

岩手大学では平成19年度から全学必須で基礎ゼミが初年次教育として全学生に課せられています。この科目は、共通教育の導入、専門教育の導入そして大学生活への導入を築こうとする、転換教育として位置づいています。「転換」は後期中等教育からの転換であり、社会人への転換を求めてであり、専門の豊かさに目を向ける転換にも関わるものです。ここでは高等学校での学習とはかなり異なる問いかけがなされると思います。必ずしも正解あるとは限らないのです。問いそのものを自分で創らねばならぬことも少なくないのです。創造性に富んだ批判する力が問われますし、多様な価値観に接する中から学ぶことも少なくないはずで、教師を挟み、学生が相互に積極的に学びあう環境を作り上げることが問われます。社会を知る第一歩になります。大学が社会そのものですし、同時にキャンパス外の社会から直接学ぶ機会も多く生まれます。いやおうなしに社会の中の「私」が問われていきます。

### ■ 研究交流会から

昨年12月25日、基礎ゼミ担当者の「研究・交流会」が行われました。出席した教員は50名。各学部から実践報告がなされ、それを基に全体討議が行われました。それぞれの学部で特色ある教育を進めると共に、初年次教育としての共通課題を認識し、相互に交流がはかられました。PDCAサイクルは多くの基礎ゼミで展開されています。課題に直面することで学生は、このサイクルを学んでいます。グループワーク・ロールプレイの活用も見られてい

ます。小・中・高での総合的学習の時間を経験してきた学生にとって、グループワークで問題解決をはかることは比較的身近な学習方法として存在していると思われます。また、主題・探求・発表・共有という「共同で進める」学習が根づくことが問われています。本学の基礎ゼミの歴史からも、専門教育との有機的連携づけに関しては、教育面での前進が見られました。ここではむしろ、初年次教育だということを強調することが必要なのかもしれません。

幾つか課題が示されました。他の教科との関連はまだ希薄であり、合同ゼミや合同発表会をすることで新しい展開が期待されます。上級生の「活用」も進んでいません。ゼミに上級生を入れること、学生同士の多様な学習の輪を用意することは、この学習の可能性を広げるものだと思います。あるいは施設見学においてボランティアを活用することは積極的に検討される課題です。図書館見学を取り入れているゼミも見られます。職員の過重な負担にならないためにも、上級生のボランティアの活躍を取り組むことは大いに期待が持てます。本年もこの「交流会」を行う企画が立てられています。

### ■ 「学びのはじめ」について

「学びのはじめ」という「副読本」が編纂されています。この活用が課題に挙げられました。各ゼミの実践が、この副読本に反映されれば、活用しやすい副読本になると思います。こんな実践もあるのか、この課題ならうちのゼミで扱ってみよう。合同で展開できるかもしれない。このような動きが副読本から生まれれば、この副読本が生きたものになっていきます。実践を反映した副読本づくりが問われていることを確認しました。



部門長 小笠原 義文

## ■平成22年度前期駐輪指導の実施

構内環境改善と新入生への学内交通ルールの周知を図るため、4月19日(月)～23日(金)まで学生支援部門委員、学生議会運営委員会委員及び学生支援課が協働で中央学生食堂前、館坂門付近で駐輪指導を実施しました。

## ■ボランティア活動に関するセミナーの実施

岩手大学ESD銀河セミナーの一環として、次のとおりボランティア活動に関するセミナーを3回実施しました。

### 【ボランティア活動に関するセミナーシリーズ(1)】

日時：平成22年4月28日(水)16:30～18:00  
 場所：岩手大学図書館生涯学習・多目的学習室  
 講師：村上 むつ子  
 (国際基督教大学サービス・ラーニング・プログラム  
 担当講師／インストラクター)

演題：ボランティア活動と「サービス・ラーニング」  
 -アメリカ及び国際基督教大学の経験から-

### 【ボランティア活動に関するセミナーシリーズ(2)】

日時：平成22年5月26日(水)16:30～18:00  
 場所：岩手大学図書館生涯学習・多目的学習室  
 講師：宮崎 猛  
 (創価大学教職大学院准教授)

演題：地域・学校・大学を結ぶボランティア  
 -サービス・ラーニングによる高大連携-

### 【ボランティア活動に関するセミナーシリーズ(3)】

日時：平成22年6月30日(水)16:30～18:00  
 場所：岩手大学学生センター棟会議室  
 講師：山本 克彦  
 (岩手県立大学社会福祉学部准教授)  
 演題：ボランティアと地域と学びをいかに結ぶか!  
 -岩手県立大学・山本克彦先生とコミュニティー・  
 ベイスド・ラーニングについて語る-

## ■授業料免除等に関する規則の一部改正について

内定取り消しなどの本人の責によらない事情、大学院博士課程研究遂行協力員制度の新設、1/4免除額の新設による授業料免除規則の一部改正を平成22年4月1日から適用して行いました。

## ■第53回盛岡・つなぎ間ロードレース大会の実施

日時：平成22年5月29日(土) 8:30～  
 区間：太田橋脇～ホテル紫苑までの12km  
 参加者：学生126名、教職員11名  
 成績：第1位農学部、第2位工学部、  
 第3位人文社会科学部、第4位教育学部

## ■平成22年度Let'sびぎんプロジェクトの実施

Let'sびぎんプロジェクトは、学生が共同で行う独創的なプロジェクトを支援するもので、1件あたり50万円を上限に経費を支援します。

今年度は、書類審査及び面接の結果、7件を採択しました。

また、今回から地域社会においてスポーツ交流、演奏・公演・展示会等による地域貢献活動を行う場合の κατηγοリーを別枠で設けました。

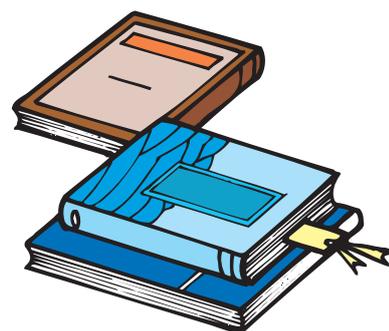
## ■学生議会からの要望に対する解決策を教職員と学生とが協働で検討

平成22年度前期学生議会通常総会からの要望事項に対する解決策を検討するに当たり、今回から教職員と学生代表とが協働で検討会を立ち上げ、本学の現状を理解の上、解決策を検討しました。

## ■平成22年度担任教員・保健管理センター教員連絡会の実施

保健管理センター教員から担任教員へ最近の学生相談の傾向等について情報提供するとともに、学生指導を行う上での留意点等について意見交換を行いました。

日時：平成22年9月10日(金)13:00～15:00  
 場所：学生センター棟G29講義室



# キャリア支援部門

キャリア・アドバイザー 中村 謙一

## 取組みの概況と課題

深刻な就職難が続き就職活動の早期化長期化により学業への影響と学生の精神的負荷が増している。本学では「キャリア教育」と「就職支援」を車の両輪として学生の自立支援に取り組んでいる。平成21年度（平成22年3月卒業）の就職状況は、前述の厳しい雇用環境の影響で学部生・大学院生共に就職率が前年を下回った。

**就職率 学部 21年度：93.0%（20年度：96.3%）**  
**大学院 21年度：91.6%（20年度：97.9%）**

キャリア教育に関しては、岩手県、岩手経済同友会、岩手県立大学と連携して実施した、地元就職を促すキャリア科目「地場産業・企業論」、および同様の趣旨で昨年度後期から盛岡市、盛岡商工会議所と連携して実施した「知財ワークショップ：地場産業・ブランド戦略論」は地域における連携の好事例となっている。また企業ニーズの把握と雇用拡大のための企業訪問については、訪問エリアの拡大や情報収集等で改善をはかった。この取組みは、教職員が連携して実施することでFD（教育力開発）の効果もあり、授業への反映も期待できる。ジョブカフェいわて等との連携によるガイダンスも幅広く展開した。

今後の課題として、入学時からのキャリアガイダンスについて全学的実施を加速する必要がある。また学生の進路、就職内定等の情報についてタイムリーな把握でアクションにつなげるよう仕組みの整備が急がれる。

## 前期キャリア教育実施状況

- ・4年目となる「キャリアを考える」は履修学生が335名へとさらに増大した。
- ・3年目となる岩手県立大学と共同開講の「地場産業・企業論」は履修学生33名（岩手大学18名、岩手県立大学15名）で土曜日の午前に岩手県立大学アイーナキャンパスを会場に実施しました。今年度も岩手県知事の講演を皮切りに、企業の人事部門長などの講演や企業訪問を通じて地元企業の魅力を探求しました。それぞれの企業は事業紹介や企業理念の紹介、求める人材像などを説明し、その後に職場訪問を行った。学生が積極的に企業について知る努力をすると同時に、企業も情報発信を積極的に行うことで相互認知と相互理解を進め、地元就職と地域振興をはかる試みでもある。

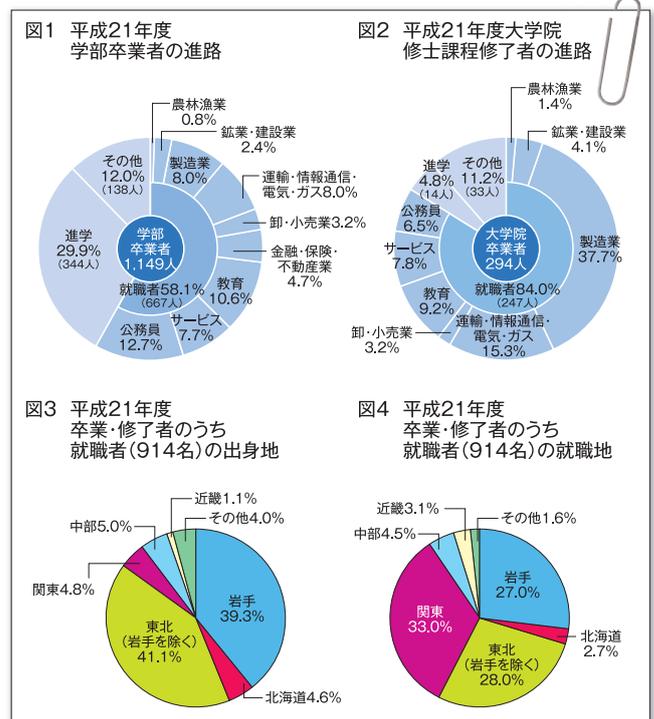
## 進路・就職の状況（進路・就職者の出身地と就職地）

就職率の低下は概況のとおりであるが、進路のデータからもその状況が顕著である

### 学部卒業者の進路

**21年度：就職58.1% 進学29.9% その他12%**  
**20年度：就職66.5% 進学25.3% その他8.3%**

就職者の内訳を見ると、平成21年度の卒業、修了者の出身地は約80%が東北であるが、就職地では55%が東北、33%が関東となっている。



## 卒業、修了された方々と学長との懇談会in仙台

初年度の盛岡市、第2回目の八戸市開催に続き今回は8月に仙台で開催した。大学側からは学長、理事、監事、学部長が出席し、大学の取り組み報告に引き続き懇談を行った。

## 就職支援システム

平成21年から従来のシステムを全面更新して、「岩手大学就職ナビ」と名付けたシステムを導入した。学生が求人情報、ガイダンス、企業説明会、就職相談等についてインターネットや携帯電話からも情報入手、閲覧、申し込みが可能となっている。企業からの求人情報の直接入力も可能となっている。

図5 学生向け「岩手大学就職ナビ」ポスター



## 人間と文化 大学の歴史と現在

大学教育総合センター 江本 理恵

「大学の歴史と現在」は、「大学」についてのその成り立ちの歴史や社会との関わり、そして「岩手大学」が直面している課題を学ぶことにより、これからの大学生活を充実したものにしてもらうことを目的として、今年度前期から新規開講しました。

前半では、「大学」の歴史をテーマに、12世紀の中世ヨーロッパにおける大学の発祥やその教育の特徴、日本の大学の近代史、岩手大学の歴史を扱いました。日本の大学の近代史については、評価室の大川先生にご協力いただきました。後半では、「岩手大学」の現在をテーマに、大学評価や情報化の推進、環境問題、男女共同参画、地域連携などをテーマに、担当の理事・副学長の先生方にきていただいております。

今回の授業では、試験的に、グループ活動を取り入れてみました。グループ活動では、「岩手大学をより良くするために学生ができること」をグループ単位で考え、準備し、発表してもらいました。発表当日は、学長、事務局長にもご出席していただき、学生さんの問題意識や解決案についてコメントをいただきました。受講した学生さんからも「学長に質問できたことがうれしかった」「学長さんが気さくに接してくれてうれしかった」という声をいただき、お忙しい学長さんに無理を言ってご出席いただいた甲斐を感じています。

多少、盛り込みすぎのところもありましたので、内容をさらに精査し、より充実した授業として開講したいと思っています。



## 人間と文化 日本の文学

非常勤講師 佐藤 竜一

「日本の文学」と銘打っていますが、授業のすべてが宮沢賢治に関する内容で、さながら宮沢賢治入門といった趣きです。よく知られているように、賢治は岩手大学農学部的前身・盛岡高等農林学校の出身です。せっかく岩手大学に入学したのだから、賢治についてもっとよく知ってほしい。そうした思いを込めながら話をしています。

受講した学生は74名。受講者は1年生を想定していたのですが、4分の1くらいは2年生以上となりました。さすがに農学部が一番多いのですが、工学部、人文社会科学部、教育学部も人数はほぼ均等、中国からの留学生も3人いました。

賢治のルーツ、東京体験、方言、エスペラント、ベジタリアリズム、音楽——などをキーワードに、毎回テーマを変えて多面体ともいえる賢治の内面に迫ってゆきます。「革トランク」「よだかの星」といった作品も読みました。

授業後に記してもらったレスポンスカードには「賢治が作曲した歌を聞いて感動した」「賢治がサラリーマンをしていたなんて知らなかった」など、従来抱いていた賢治のイメージが変わったという感想が毎回寄せられました。中でも賢治が晩年取り組んだ東北砕石工場での仕事を紹介したときは、NHKの「歴史秘話ヒストリア」という番組で取り上げられたテーマであることもあって、大きな反響がありました。

挫折感を抱きながらも一生懸命自分の仕事に励む賢治の姿は、これから社会に出てゆく学生たちにとって、大きな励みとなったようで、「賢治を目標にして生きていきたい」と書いた学生も結構いました。

岩手大学では農業教育資料館など、賢治が学んだ遺産が多く残っています。賢治について学ぶことが、母校をもっと好きになるきっかけとなり、社会に出る際の糧となってくれたらよいな。そう思って授業に取り組んでいます。

## 環境人材育成プログラム

環境人材育成プロジェクト推進教員 中島 清隆  
環境人材育成プログラム責任者 玉 真之介

### 2010年度 環境人材育成プログラムの進捗状況

2009年度から、環境省の「平成21年度環境人材育成のためのプログラム開発事業」に採択された『ISO14001と産学官民連携を活用した「π字型」環境人材育成プログラム』（以下、環境人材育成プログラムと略す。）を進めてきました。当プログラムは2年目を迎えています。

環境人材育成プログラムは、ESD (Education for Sustainable Development:「持続共生教育」岩手大学訳)の価値観に基づき、基礎的環境力(横軸)の充実に加え、個々の学部における専門分野(縦軸1)のほかに、「環境マネジメント」の実践的環境力(縦軸2)を備えた「π字型」環境人材の育成を目指すものです。

環境人材育成プログラムでは、次の4つの取組を実施しています。

1. 共通教育における環境教育の充実
2. 環境マネジメント実務の実習プログラム開発
3. 学生による地域のグリーン化支援
4. 大学による「環境管理実務士」の資格認定

2010年度は、〔取組2〕ISO14001学内監査実務科目「環境マネジメント実践学」と、地元中小企業の経営グリーン化支援科目「環境マネジメント実践演習」を開講しました。

「環境マネジメント実践学」では、4学部をめぐるサイトツアーの後、ISO14001の要求事項や内部監査の復習を経て、内部監査の準備を行いました。内部監査員(教職員)と内部監査補助員(「岩手大学の環境マネジメント」履修済の学部生:30人)が内部監査チームを構成するとともに、オブザーバー(「岩手大学の環境マネジメント」未履修の学部生:28人)を含め、内部監査で使用するチェックシートの作成を行い、ロールプレイを経て、2010年7月1日と8日に、4学部(人文社会・教育・工・農)、事務局総務企画部・学務部と岩手大学生協同組合7か所の内部監査を行いました。その後、内部監査チームで内部監査所見書を作成し、内部監査委員会での審議を済ませ、講義「環境

マネジメント実践学」の一環として行われた岩手大学ISO14001内部監査が終了しました。



「環境マネジメント実践演習」の一環として、岩手県中小企業家同友会加盟企業における環境報告書作成の実態調査が行われました。その結果は、2010年3月のいわて環境人材育成フォーラムで公表されました。5社の岩手県中小企業家同友会加盟企業が、岩手大学の学部生による環境報告書の作成支援を受け入れてくださり、「環境マネジメント実践演習」は10月から開講されました。

〔取組3〕学外団体と連携して行われる学外実習(インターンシップ・ボランティア)は、2010年10月現在で10のプロジェクトが計画されています。既に、2010年8月から始まっているプロジェクトもあります。ボランティアの理解度を深めるためのセミナーは2010年10月現在で既に3回開催されました。

〔取組4〕岩手大学認定資格「環境管理実務士」の要件がプログラム開発・実証委員会で検討されています。環境管理実務士資格認定小委員会も開催される予定です。

2010年度で、環境マネジメント人材育成プログラムがほぼ具体化されます。昨年度の取組を続けながら、ESDの価値観に基づいた「π字型」環境人材の育成にさらに尽力していきます。



# いわて高等教育コンソーシアム&いわて未来づくり機構

■ いわて高等教育コンソーシアム事業推進責任者  
■ いわて未来づくり機構「地域力を支える人材育成」作業部会座長 後藤 尚人

いわて高等教育コンソーシアム(以下「コンソ」と略記)は、岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学で構成された「いわて5大学学長会議」(H12～H20)を引き継いだ組織で、いわて未来づくり機構(以下「機構」と略記)は、岩手県商工会議所連合会会長、岩手大学学長、岩手県知事を共同代表として、県内の産学官57団体が加盟して設立された組織です。共に平成20年度に発足しています。

今回は、コンソと機構が連携して取り組んでいる活動について報告します。

## ■学生による地域づくり活動 in 八幡平市

いわて未来づくり機構の「地域力を支える人材育成」作業部会(第4作業部会)と八幡平市との間で、人材育成に関わる連携事業の可能性を検討し、学生による地域づくり活動で双方が合意(5月12日)しました。ただし、主役となる学生を募集するのは、機構よりもコンソの方が分かりやすいため、機構の第4作業部会事務局(岩手大学)が世話役となりつつ、この活動をコンソの「学生の地域参加プロジェクトの実施」事業の一つに位置づけ(6月2日)、経費は八幡平市とコンソから支出することとなりました。

学生の募集については、コンソの遠隔講義(TV会議)システムを活用した説明会を6月下旬(24日&29日)に行うなどして、最終的に学生14名(岩手大5名、県立大5名、盛岡大4名)が参加し、地域づくりの対象も八幡平市兄川地区(秋田県との県境にある50世帯ほどの集落)に決まりました。

学生の主体的な活動を引き出すため、細かな指示はせず、現地の公民館に2泊3日の合宿をして、地域の方々からの聞き取り調査などを踏まえ、最終日に地域の活性化に向けたプランを発表するという計画がまとまりました。

8月20日の現地下見を経て、9月3日～5日にかけて、以下のスケジュールで兄川公民館での合宿が行われました。

### 【合宿：兄川公民館】

- \*9月3日(金)：開会式～昼食～現地調査～地域住民主催の歓迎会
- \*9月4日(土)：現地調査～昼食(地域住民と郷土料理)～現地調査～報告会準備
- \*9月5日(日)：報告会(調査結果と地域活性化への提案)～閉会式

報告会では、

- \*ハチマンタイラーと一緒に都会の子供が森林体験を行うツアー
  - \*智恵の滝(兄川)にあやかった受験生合宿などのユニークな企画に加えて、
  - \*雪よせボランティア・ミニ雪祭り
  - \*ふれあい掲示板や、溪流釣り客へのマナーをうながす看板づくり
- など、すぐに実現可能なアイデアも披露されました。(当日の様子は9月6日の岩手日報に掲載)

活性化プランを発表するだけでは実効性がないため、有言実行を実践するため、9月25日(土)に14人のメンバー中10名が参加して、看板・掲示板づくりを現地で行いました。(当日の様子は9月26日の岩手日報に掲載)

今後も、ミニ雪祭りなどの実施に向けて、この活動は続きます。



## ■地域リーダー像の検討

コンソの中心的課題のひとつに「地域リーダー育成プログラム」の試行と実践がありますが、このプログラムの核となるリーダー像について、幅広く内外からの意見を取り入れるため、コンソから機構の第4作業部会に地域リーダー像の検討を依頼(6月17日)しました。

これを受けて、機構第4作業部会では、月1回のペースで地域リーダー像提言のための勉強会を開催し、年明けにも提言をまとめることとなります。

これまでに、

- \*8月2日(月)「産学官連携リーダー」  
ゲスト：岩淵明(岩手大学理事・副学長)
  - \*8月28日(土)「地方自治体首長」  
ゲスト：中村哲雄(中村牧場・中村家畜診療所所長・前葛巻町長)
  - \*9月30日(木)「NPOリーダー」  
ゲスト：両川いずみ(いわて子育てネット副理事長兼事務局長)
- を行い、今後は岩手県と経済同友会からのゲストをお招きする予定です。

# アイアシスタント&匠の技

教育改善部門 江本 理恵

## ■アイアシスタントのプチ改修

今年度の前半に、アイアシスタントのプチ改修を行い、以下の機能が使えるようになりました。今後も少しずつ改良を進めて参りますので、ご意見をおよせください。

### ●教材の事前登録

今まで、授業が始まってからでなければ教材の登録ができなかったのですが、教材の事前登録が可能になりました。登録時には、「公開日」も設定できますので、事前に教材とその公開日を登録しておけば、公開日には自動的に教材が学生に公開されます。

ファイル指定 リンク名称(はなすLTP)	上:公開区分 下:公開日
1 C:\Users\Re EMOTO\Desktop (参照...) リンク名称 配布資料(PDFファイル)	● 履修者 ○ 学内 ○ 学外(一般) 2018・年 12・月 01・日
2 リンク名称 (参照...)	● 履修者 ○ 学内 ○ 学外(一般) ・年 ・月 ・日

公開日が設定できます。

### ●iカード/課題・レポート

#### ■追記機能

一度「出題」してしまったら一切修正のできなかったiカード&課題・レポート機能ですが、出題後も「追記」できるようになりました。大学で運用しているシステムとして、一度学生に「出題」したものを「なかったこと」にはできないのですが、例えば、間違えて出題してしまったとしたら、その旨を追記することができます。提出後の課題の「内容説明」欄に表示される「追記」ボタンをクリックすることで、追記できます。

内容説明 【はなすLTP】
<p>配布した資料に従って、以下の課題のレポートを作成しましょう。</p> <p>当レポートを提出する際には、必ず、学籍番号と名前等が書かれていることを確認してください。</p> <p>各ファイルが壊れているなどのトラブルが発生した場合は、大学のアドレスにメールを出します。この期間、必ず確認するようにしてください。</p> <p>2018.12.23 23:23 (山下が確認済)</p> <p>この課題は間違えての出題です。次の課題が本物のので、そちらに提出してください。こちらには提出しませんので。</p>

「追記」ボタンをクリックすると「追記」できます。

#### ■遅刻提出機能

一度「出題」してしまったら一切修正のできなかったiカード&課題・レポート機能ですが、出題後に「提出期限の延長」(=「遅刻提出期限の設定」)ができるようになりました。

長」(=「遅刻提出期限の設定」)ができるようになりました。

遅刻提出期限	2018・年 12・月 10・日 23:59:59
--------	---------------------------

遅刻提出の期限を設定できます。

延長期間中に提出されたファイルには、ファイル名に \_chikokuと追記され、また、提出する学生にも「遅刻提出」である旨が明示されます。ただし、それをどう判断するかは、先生方に任されておりますので、例えば、「遅刻提出期間中の提出であっても減点しない」のであれば、その方針を「追記」するなどして学生に伝えてください。

#### ■受理機能

学生にとっては、提出したレポートが教員にきちんと受け取られているかどうかは気になる場所。また、提出期限後にレポート用紙に書いたレポートを提出された場合の管理も悩みどころ。そのお互いのコミュニケーション促進のために、課題・レポートに「受理」機能を実装しました。

アイアシスタントから課題・レポートを出題した場合、提出欄に「受理」ボタンが表示されます。学生から直接手渡してレポートを受け取った場合、この「受理」ボタンをクリックすると、電子ファイルで提出した学生同様、提出の記録を残すことができます。同様に、学生も、提出したレポートを教員が受け取ったことを確認できます。

さらに、アイアシスタントの「履修者」-「対応状況」にその記録が残りますので、課題・レポート等の提出状況一覧を簡単に作成することができます。

学籍番号	氏名	提出日(受領日)	返却	最終提出日	備考
0010000	岡地 雅	2018-08-14(2018.8.14)	<input type="checkbox"/>	2018-08-13	
0010000	藤原 謙		<input type="checkbox"/>		
0010000	奥野 亮	2018-08-15	<input type="checkbox"/>		
0010000	田嶋 真輝	2018-08-18	<input type="checkbox"/>		

「受理」ボタンをクリックすると「受理」できます。

#### ■「匠の技」プロジェクト-動画コンテンツの開発

「匠の技」プロジェクトでは、今年度は、他大学等で撮影してきた授業とインタビューを組み合わせた、10~12分程度の動画コンテンツの作成に力を入れています。お時間がありましたら、ぜひ、ご覧ください。

## 理 念

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起するとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことをその理念としています。

この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の関心・責任・協力のもとに実施されています。

## 教 育 目 標

全学共通教育科目は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され、それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）の10年」<sup>(注)</sup>を共通に意識することに努めています。

(注)2002年にヨハネスブルク(南アフリカ共和国)で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット)で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採択されて、2005年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

### 1. 転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。転換教育科目は、大学での新たな学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでのルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の一つです。

### 2. 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を全学生に習得させることを教育目標とする科目です。授業科目は、「外国語科目」、「健康スポーツ科目」および「情報科目」に区分されます。

### 3. 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、特に上記の全学共通教育の理念における「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という3項目に基づいて、次のように設定されています。

- ①さまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ②あらゆる分野の日常生活の営みの基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すことができるという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ③多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援。

以上のような教育目標の達成をめざす教養科目は、「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」、「高年次課題科目」及び「環境教育科目」に区分されます。

# 委員会及部門会議名簿

## 大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成22年6月5日)

	氏名	担当部局等
センター長	玉 真之介	理事(総務・教育・学生担当)
副センター長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
入試部門長	玉 真之介	理事(総務・教育・学生担当)
全学共通教育部門長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
教育改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
専門教育等連携部門長	西 谷 泰 昭	工学部
学生支援部門長	小笠原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	安 田 準	農学部
副学部長又は評議員	井 上 博 夫	人文社会科学部
	遠 藤 孝 夫	教育学部
	藤 代 博 之	工学部
	長 澤 孝 志	農学部
教務関係委員長	吉 村 泰 樹	人文社会科学部
	菊 地 洋 一	教育学部
	小 川 智	工学部
	河 合 成 直	農学部
学務部長	山 中 和 之	学務部

## 大学教育総合センターセンター会議委員名簿

(平成22年6月5日)

	氏名	担当部局等
センター長	玉 真之介	理事(総務・教育・学生担当)
副センター長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
入試部門長	玉 真之介	理事(総務・教育・学生担当)
全学共通教育部門長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
教育改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
専門教育等連携部門長	西 谷 泰 昭	工学部
学生支援部門長	小笠原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	安 田 準	農学部
センター専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
	江 本 理 恵	大学教育総合センター
学務部長	山 中 和 之	学務部

# 委員会及部門会議名簿

## 入試部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター長
専任教員	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
兼務教員	中 村 安 宏	人文社会科学部
	土 屋 明 広	教育学部
	西 村 文 仁	工学部
	廣 田 純 一	農学部
各学部入試委員会 (正・副委員長)	海老澤 君 夫	人文社会科学部
	高 橋 宏 一	人文社会科学部
	内 山 三 郎	教育学部
	境 野 直 樹	教育学部
	大 石 好 行	工学部
	平 塚 貞 人	工学部
	武 田 純 一	農学部
入試課長	喜 多 一 美	農学部
	長 代 健 児	学務部

## 全学共通教育部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員	齋 藤 博 次	外国語分科会
	鎌 田 安 久	健康・スポーツ分科会
	鈴 木 正 幸	情報基礎分科会
	武 田 京 子	思想と文化分科会
	織 田 信 男	心と表象分科会
	高 橋 宏 一	公共社会分科会
	三 井 隆 弘	現代の諸問題分科会
	橋 爪 一 善	生物の世界分科会
	三 浦 康 秀	自然と数理の世界分科会
	山 口 明	科学技術分科会
	河 合 成 直	環境分科会
各学部教務委員会	横 山 英 信	人文社会科学部
	遠 藤 匡 俊	教育学部
	鈴 木 正 幸	工学部
	吉 川 信 幸	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

## 教育改善部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
全学共通教育部門長	河 田 裕 樹	人文社会科学部
専任教員	江 本 理 恵	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出委員)	五 味 壯 平	人文社会科学部
	砂 山 稔	人文社会科学部
	武 井 隆 明	教育学部
	岩 木 信 喜	教育学部
	山 口 明	工学部
	今 野 晃 市	工学部
	橋 爪 力	農学部
	塚 本 知 玄	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

## 専門教育等連携部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	西 谷 泰 昭	工学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員 (各学部教務委員会選出教員)	三 浦 康 秀	人文社会科学部
	犬 塚 博 彦	教育学部
	小 川 智	工学部
学務課長	板 垣 匡	農学部
	今 野 悟	学務部

## 学生支援部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	小笠原 義 文	教育学部
兼務教員 (各学部学生委員会選出教員)	白 倉 孝 行	人文社会科学部
	上 濱 龍 也	教育学部
	今 野 晃 市	工学部
	立 石 貴 浩	農学部
学部選出教員	菊 池 孝 美	人文社会科学部
	名古屋 恒 彦	教育学部
	一ノ瀬 充 行	工学部
	黒 田 榮 喜	農学部
学生支援課長	佐 藤 祐 一	学務部

## キャリア支援部門会議委員名簿

(平成22年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	安 田 準	農学部
兼務教員 (各学部就職委員会選出教員)	内 田 浩	人文社会科学部
	大河原 清	教育学部
	小 川 智	工学部
	古 賀 潔	農学部
キャリア支援課長	大 内 正	学務部



## 編集後記



今年の夏は本当に暑かったですね。教室へのエアコンの整備を切実に願った年でした。でも、あっという間に白鳥の音がこだまするように。

来年はどんな年になるのでしょうか。良い年になるといいな。

工房うさぎごや

# erudio 13

2010年11月15日発行



国立大学法人  
岩手大学 大学教育総合センター  
Iwate University : University Education Center  
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

- 入試部門 **tel.019-621-6926**
- 全学共通教育部門 **tel.019-621-6925**
- 教育改善部門 **tel.019-621-6924**
- 専門教育等連携部門 **tel.019-621-6925**
- 学生支援部門(学生支援課) **tel.019-621-6058**
- キャリア支援部門(キャリア支援課) **tel.019-621-6059**

■ 部門共通 **fax.019-621-6928**  
電子メール [uec@iwate-u.ac.jp](mailto:uec@iwate-u.ac.jp)  
Webサイト <http://uec.iwate-u.ac.jp/>

